

20	蒲郡	蒲郡市立形原北小学校	オダ サチエ 小田 幸恵
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目 自信をもって取り組み、相手に喜んでもらえる達成感を感じる子の育成

～自立活動「くるくるグッズをプレゼントしよう『はなまるパンダ工房』でみんなを笑顔に」の実践から～

【 内容 2 心理的な安定 3 人間関係の形成 】

研究要項

1 主題設定の理由

本学級は知的障害学級で、1年生1名、4年生2名、5年生3名の合計6名が在籍している。明るく朗らかで、学年関係なく声をかけたり仲よく遊んだりしている。休み時間には、絵を描いたり紙飛行機づくりなどの工作に取り組んだりする姿も見られ、ものを作ることが好きな子が多い。一方、授業になると、自信がなく固まったり、担任以外の先生に声をかけられるともじもじして声が小さくなったりする。

子どもたちは、4月から様々な「もの作り」をしてきた。7月には、誕生会に向けて「あじさいくるくるキーホルダー」を作った。紙皿に掛け渡した糸に、裂いた布紐を互い違いに巻き付け(裂き織り)たものに、裏地のフェルトとストラップを付け、特別支援学級(あじさい組)の仲間にプレゼントした。完成したキーホルダーとメッセージカードを入れ、ラッピングしたプレゼントを眺める子どもたちからは、達成感がうかがえた。誕生会当日は、恥ずかしそうに一言添えて渡し、仲間に喜んでもらえる満足感を得た。

そんな子どもたちが身につけつつある手先の力を高めながら、さらに仲間や先生とのかかわり方を学んでほしいと考えた。そこで、自分たちが作った製品「くるくるグッズ(キーホルダー・コースター)」を先生たちにプレゼントする活動を設定する。自信をもって編み進められるように一人一人の実態に合わせた台紙「くるくる皿」を用意する。贈る相手への思いを意識させるため、好みの色を聞き、それに合わせて製品を作るために、製作活動を行う場「はなまるパンダ工房」は、“オーダーメイド”方式を取り入れる。子どもたちは、先生たちからのオーダーを受け、製品を作ってプレゼントするまでの過程を担うことで、責任感と活動への意欲を高めるだろう。また、キーホルダーとコースターの各チームに分かれることで、チームの仲間と協力して作ったり、先生たちとよりスムーズにやりとりしたりできると考えた。

これらの活動を通して満足感や達成感を味わい、自信をもって学習に取り組む姿や仲間や周りの人とかかわろうとする姿につながっていくことを期待する。

2 研究の方法

抽出児童Aの変容を追うことで、手立ての検証をしていく。

(1) 児童A(5年生)

こんな子を

- 学級リーダーとして使命感があり、仲間を注意する声かけをしたり、任された仕事を行おうとしたりする。
- 関係が築けていないと一方的に仲間を批判することがある。自信がもてず手が止まることがある。先生に自分から話しかけるのをためらうことが多い。



こんな子に

- ・見通しをもって製品を作り、自信をもって活動に取り組む子
- ・仲間と協力して、人とかかわる喜びや相手に喜んでもらえる達成感を味わう子

(2) 研究の手立て

<手立てⅠ>個々の実態に合わせた「視覚支援グッズ」

① くるくる皿

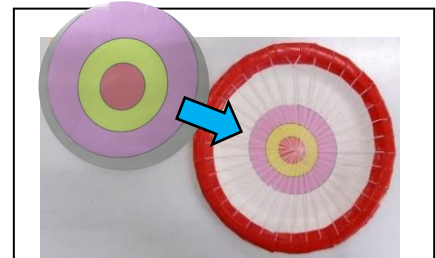
製品を編むための台として、放射線状に糸を渡した「くるくる皿」を用意する。各々の手先の力に応じて丁寧に編むことができるように、編み目を3種類（9・16・32本）用意したり、矢印を付けたものや区切りの色を交互に変えたりするものなどを選択できるようにする【資料1】。最初は、「ジャンプ、トンネル」と交互に編むことや、布紐がたるまないように引っ張ることなど、注意点を繰り返し伝え、基本の編み方を確実に身につけられるようにする。



【資料1】①一人一人の実態に合わせた「くるくる皿」

② 仕上がりチェックボード

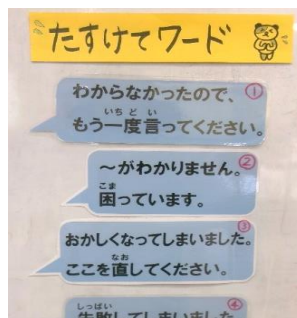
「くるくる皿」には、同心円を描いて色分けした「仕上がりチェックボード」を取り付けられるようにする【資料2】。布紐を編んでいくうちに、赤色の円や黄色の円が徐々に隠れていく様子を見て、完成への見通しがもてるようにする。また、色の枠内に布紐をおさめることで、引っ張り加減を意識しながら制作できるようにする。さらに、2種類の布紐を組み合わせ、色が変わるタイミングで教師に報告するように伝える。



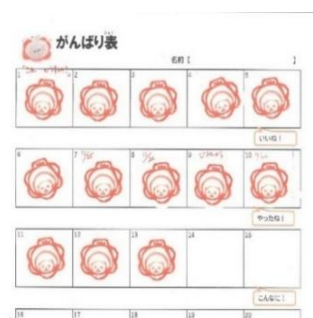
【資料2】「くるくる皿」につけた「仕上がりチェックボード」

③ たすけてワード

自分から話しかけることが苦手である子どもたちの実態をふまえ、「たすけてワード」を用意する【資料3】。うまくいかずに迷ったり困ったりしたときに言う定型文を吹き出しにする。子どもたちが報告する場所の目の前に掲示し、失敗した不安から助けとして言い出しにくい言葉を並べておくことで、自分で選んで伝えられるようにする。



【資料3】目につく場所に掲示した「たすけてワード」



【資料4】はなまるパンダシールを貼った「がんばり表」

④ がんばり表とはなまるパンダシール

毎時間記入する「はなまるパンダ工房日記(ふり返し)ファイル」の1ページ目に、「がんばり表」【資料4】をはさむ。活動への意欲を高めるために、個々の目標が達成できたときや毎時間のふり返し後に、その場で「はなまるパンダシール」を渡す。

<手立てⅡ>目的と相手意識を高める“オーダーメイド”方式

① チームのみんなで“オーダーメイド”

贈る相手を意識して最後まで責任をもって作ることができるように、先生たちに作ってほしい製品や色のオーダーをとる場を設ける。また、チームの仲間と協力して活動できるように、キーホルダーチームとコースターチームにわけ、チームの中で、せりふを言う役、メモする役、写真を撮る役を分担する。一緒に行き、助け合えるようにする。希望に沿った製品が完成したら、同じチームの3人でプレゼントしに行く。

② オーダーシートの活用

オーダーをとる際、自信をもって先生とのやりとりができるように、話しかけるときの言葉や、質問に対する答えをチャット形式にまとめ、書き込めるようにした「オーダーシート」を用意する【資料5】。オーダーシートを見ながら、繰り返し練習する時間を設ける。

【資料5】1先生へのオーダーシート

3 単元構想

仲間や先生とかかわりをもちたいが、言い出せなかったりうまく伝えられなかったりする子どもたちの実態から、自立活動の目標のうち「3 人間関係の形成」に重点をおいて単元を構想した【資料6】。

【資料6】単元構想「学習の流れと子どもの反応」★は児童Aの意識の流れ

1 学期をふり返って…①②

- ・誕生会で「あじさいくるくるキーホルダー」をプレゼントしたら、喜んで使ってくれてうれしかったよ
- ・もっと何か作って喜んでもらいたいな
- ・先生たちもキーホルダーがほしいって！
- ★よっしゃー作ろう！

先生たちのためにみんなで作ろう！
「はなまるパンダ工房」オープンだ！

「はなまるパンダ工房」の練習をしよう③④⑤⑥

- ・練習したらコースターの作り方を覚えてきたよ
- ★家に持って帰って見せたら、お母さんが花びらみたいですてきだねって書いてくれたよ！
- ・もっと作りたいな
- ・これなら先生たちにも作ってあげられそうだね
- ★ぼくはI先生に作りたいな
- ・先生たちは何色が好きかな。聞きに行ってみようよ



完成したコースター(左)とキーホルダー(右)

これでばっちり！いよいよオープンだね！

「はなまるパンダ工房」を開こう⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭

- ・ぼくは細かい作業が得意だからコースターの仕上げをしようか
- ★I先生は緑色がいいって
- ・気に入ってもらえるようにきれいに作りたいな
- ・糸を通す場所を間違えないようによく見なくちゃ
- ・〇〇さんが1回ずつ布を中心に集めていてよかったよ
- ★I先生が「完成が待ち遠しい！」だって
- ・プレゼントするときに、メッセージカードも書きたいな
- ・〇〇先生喜んでくれるかな
- ★I先生のキーホルダーができたよ
- ・「せりふシート」を見なくてもいえるようにしたいな
- ★I先生のところへプレゼントしに行きたいな

<工房の活動の流れ>

1. 作る分担を決めよう
2. オーダーをとろう
3. チームに分かれて作ろう
(キーホルダーチーム/コースターチーム)
☆仲間の作業を見よう「チェックタイム」
☆先生からコメントをもらおう
「はなまるレターコーナー」
4. ラッピングをしよう
5. 渡す練習をして、プレゼントしよう

先生たちが喜んでくれたよ！大成功だね！

「はなまるパンダ工房」をふり返ろう⑮

- ・〇〇先生が早速使ってくれていたよ。うれしいな
- ★I先生が「違う学校へ行っても使いたい」って言っていたよ。喜んでくれた！
- ・△△さんのやり方を真似したら、からまりにくくなったよ
- ・みんなでもっとたくさん作ろうよ
- ★誕生会のプレゼントも作らなくちゃ

みんなで協力して作れてよかったね
先生たちに喜んでもらえてうれしいな

4 実践と考察

＜手立てⅠ＞個々の実態に合わせた「視覚支援グッズ」

（１）「くるくる皿」をつかって、すすんで製作する児童Ａ

児童Ａは、１学期に仲間へプレゼントしたときと同じ９本の「くるくる皿」を使用してしばらく製品作りを進めてきた。既に周りには１段階細かい１６本で編み始めている仲間もいた。教師が「１６本に挑戦してみる？」とたずねると「うん！」と即答した。

１６本の「くるくる皿」は、９本に比べ編み目が細かいため緩んだときに修正しにくいというデメリットがある。児童Ａは編み目をとばして編んでいて、不自然な隙間ができていた。そこで、教師が手本を見せながら１回ずつ引っ張って編むことを提案すると、納得した顔をしていた。毎回布紐を引っ張ることで、編み目と編み目の間に隙間がなくなり、厚みが均一になった。その日のふり返りでは、「こうごにあめた。くっつけた」とあり、スモールステップの支援により児童Ａができるようになったことを実感し、自信をもち始めたことがうかがえた【資料７】。



【資料７】児童Ａのふり返り（第１０時）

（２）「仕上がりチェックボード」で確認しながら製作する児童Ａ

くっつけて編めるようになってきた児童Ａに、確実にできることを確認してから次の段階へ進めるように「仕上がりチェックボード」を用意した【資料８】。そうしたことで、１つ目の色を枠内におさめるためには、布紐を引っ張らないといけないことが視覚的にわかり、こまめに布紐を引きながら編むことができるようになった。さらに、仕上がりの規格を作ったことで、色が変わるたびに布紐を変えることが分かり、完成までの見通しをもって製作することにつながった。



【資料８】「仕上がりチェックボード」を使って編む児童Ａ

「仕上がりチェックボード」の取り付けは、製品の大きさの目安になるだけでなく、報告のタイミングを知る目安にもなった。これまで報告することが苦手な児童Ａは、教師が声をかけるまで編み続け、色のバランスが悪かったり布紐がなくなるまで編み大きくなりすぎたりすることがあった。ボードの色が変わるときや布紐を変えるときに報告をする必要感が生まれたことで、より正確な製品を仕上げることができることにつながった。

（３）「たすけてワード」をつかって、自ら声を上げた児童Ａ

報告や相談が苦手な児童Ａへの視覚支援グッズとして、「たすけてワード」を提示した。教師の元へ持ってきたものの「うーん…」と言葉に詰まる児童Ａに対し、黒板を指さし「どれがぴったりかな」と問いかけた。しばらく悩んだ後、６つの選択肢から「直してください」を選び、困り感を伝えることができた。

レベルアップした１６本の「くるくる皿」に慣れてきた児童Ａは、「仕上がりチェックボード」の中心から色分けした順にレベル１，２，３と色が隠れるまで編んでいた。新しいキーホルダー作りに取りかかり、レベル２までは正しく編んだが、レベル３のゾーンで１周ごとに交互に重なるはずが同じになり、バランスが悪くなっていた。児童Ａ自身が異変に気づき、「なんかへん…」と相談にきた【資料９】。「たすけてワード」にはない言葉であったが、自分で考え、困り感を伝えることができた。編み目が交互になるためには糸の本数を奇数にする必要があるため、「くるくる皿」に１６本渡した糸のうち２本を１本に縛って１５本になるように用意していたが、縛っていた糸がずれ、１６本になっていた。ずれた箇所まで２周布紐をほどこし、「これで大丈夫だよ」と言うと、自分に席に戻って制作を続け、正しく編み直したものを再び見せに来ることができた。「たすけてワード」を常に見える場所に掲示し、使う言葉や場面を知らせておくことが、児童Ａが自分で気づき教師に助けを求めることにつながった。



【資料９】教師に報告する児童Ａ

（４）「がんばり表」にはなまるパンダシールを貼り、意欲を高めた児童Ａ

その場で評価するための視覚支援グッズとして、「はなまるパンダシール」を用意した。教師の元へ来て自分の言葉で言えたときにはすぐに褒め、「はなまるパンダシール」を渡した。児童Ａは、席に戻った後に「はなまるパンダ日記」内の「がんばり表」に自分で貼り【資料 10】、うれしそうににこにこ眺めていた。

児童Ａにとって失敗は、自信をなくしたりわかっていても言い出しにくかったりして恐怖であった。しかし、その失敗を即時評価し、教師が“失敗したことを言えてえらい”というメッセージを伝えることで、児童Ａに大きな安心感を与えることができた。シールを受け取り、「よっしゃー10枚だ」と増えていく喜びを口にした児童Ａの様子から、もっと製品を作ってシールを貯めたいという気持ちになり、自信をもって製作する意欲を高めたことがうかがえた。



【資料 10】はなまるパンダシールを「がんばり表」に貼る児童Ａ

＜手立てⅡ＞目的と相手意識を高める“オーダーメイド”方式

（１）同じ目的達成のためにチームの仲間と協力する児童Ａ

児童Ａにはキーホルダーチームのリーダーを任せた。初めは行動がゆっくりで児童Ａのペースについていけない仲間に対して「早くして」や「違う」といらいちを見せしていた。

しかし、仲間の担当のせりふを読む場所を指さして教えるように声をかけ、数回その様子を見守っていると、指さしして示す姿が見られた【資料 11】。次第に、「次は〇〇先生のところへ行くよ」と声をかけ、積極的に仲間を引っ張っていく姿が見られるようになった。チームで動くことで、先生たちのところへ行く必要感やリーダーとしての責任感が生まれ、児童Ａが仲間と一緒に行動することができるようになった。



【資料 11】児童B、Cをリードしてオーダーをとる児童Ａ

（２）「オーダーシート」をきっかけに、先生たちとのやりとりを楽しむ児童Ａ

オーダーを取る場面では、「オーダーシート」をチャット形式にしたことで、だれがどの場面で何を言うのかがわかり、普段読み間違いが多い児童Ａでも、混乱せずにすらすら読み上げることができていた。

児童Ａのグループは、全部で９人の先生を担当した。たくさんのオーダーがあり、「オーダーシート」だけでは把握しづらいことがわかったため、先生たちの顔写真と希望の色、担当者を一覧にした「できたかなチェック表」を用意した【資料 12】。教室に常に掲示したことで、児童Ａは、「オーダーシート」と「できたかなチェック表」のどちらも確認しながら、さらに先生の顔写真を見て好みを想像し、より似合う色を選ぼうとする様子が見えた。

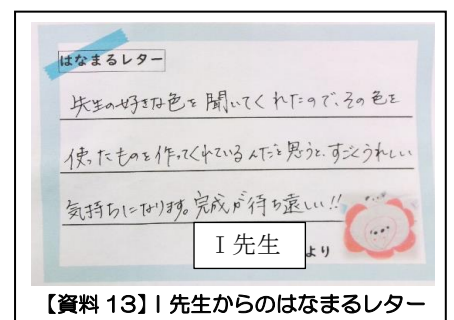


【資料 12】オーダーシートの内容を一覧にした「できたかなチェック表」

先生たちとのやりとりをさらに増やしたいと考え、はなまるレター（先生たちが進捗状況をのぞき、感想を書いてくれたもの【資料 13】）を先生方に依頼した。

児童Ａは、協力学級担任のＩ先生が放課後に書いて教室のポストに入れておいてくれたレターを見つけ、「Ｉ先生だ！」と声をあげて取り出し、嬉しそうに読んでいた。先生たちからの反応が楽しみになっているようだった。

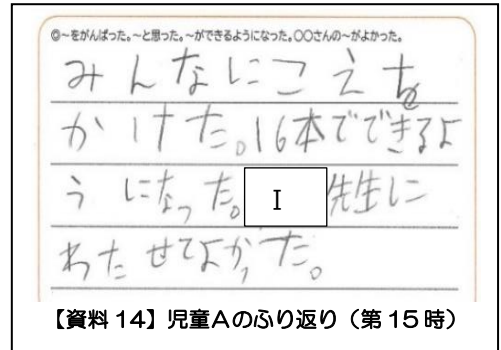
オーダーメイドにしたこととはなまるレターのやりとりを繰り返したことで、相手意識を高めることができた。さらに、プレゼントしたときの大きな達成感につながった。



【資料 13】Ｉ先生からはなまるレター

5 研究の成果と課題

児童Aは、単元の終末にふり返りを書いた【資料14】。「みんなにこえをかけた」とあることから、学級のリーダーとして相手意識をし、仲間と協力して活動できたといえる。また、「16本でできるようになった」からは、くるくるグッズを使ってことで、自信をもってレベルアップすることができたといえる。さらに、「I先生にわたせてよかった」からは、人とかかわる喜びを感じはじめ、自分で作ったプレゼントをI先生に渡せた達成感を感じることができたと考ええる。



児童Aはこれまで、教師へ困ったことを伝えることが苦手であった。それは、自信のなさや自分の弱いところを見せたくないというプライドの高さが原因であった。「くるくるグッズ」を作ってプレゼントする活動を通して、仲間と一緒に先生たちに声をかけたり、顔を上げて堂々と話をしたりするようになった【資料15】。



自信をもって話す場面は他教科でも見られるようになった。スピーチ原稿を元に学級内で読んだり発表練習をしたりするうちに、原稿を自分の机の上に置き、暗記して話す姿が見られるようになった。以前は小さかった声の大きさも、後ろの席まで聞き取りやすい声に変わった。学級の仲間や先生たちとのかかわりを通して自信をもち、相手に伝わる声で話せるようになったのである。

また、この単元の後、2学期誕生日会に向けて再び「くるくるグッズ」を作った。児童Aは「〇〇くんがいつも着ているジャンパーの色にした」と、渡す相手のことを考えて色の組み合わせを工夫した。くるくるグッズの作り方を覚え、慣れたことで、人とかかわる喜びや相手に喜んでもらう達成感を味わい、自分なりのアレンジを加えて楽しんだ。

本実践の成果と課題として、以下のことがあげられる。

- 個の実態に応じての糸の本数を変えた「くるくる皿」を用意したことで、スモールステップをふんで製作することができた。また、「仕上がりチェックボード」を取り付けたことで、見通しをもって製品をつくることができた。
- 困っているときにどうしたらよいかを想定した「たすけてワード」を提示したことで、自分から声を上げて、助けを求めることができるようになった。児童の活動を即時評価し、「がんばり表」に貼るはなまるパンダシールを渡したことで、自信をもって製作する意欲を高めることができた。
- 「オーダーメイド方式」を取り入れたことで、贈る相手を意識して製作し、チームの仲間と協力することができるようになった。また、オーダーを取りに行く場面、お礼を伝える場面、プレゼントに行く場面と、先生たちとのやりとりを繰り返し練習したことで、相手意識を高めるとともに、プレゼントしたときの達成感を味わうことができた。
- チームの仲間同士、クラスの仲間同士で互いによさを伝え合ったり認め合ったりする場を設定することや、チェックタイム（自己評価、他己評価）のもち方を工夫する必要がある。

仲間と協力することや先生たちに適切な言葉で話しかけることは、子どもたちが学校生活を送る上で大切な力である。今回子どもたちは“相手”を意識してプレゼントを贈る活動に取り組んだが、今後は相手からの働きかけを受け止め、返す活動も行っていきたい。会話や手紙など、言葉によるやりとりを楽しむことができるようになったら、相手との双方向の関係がさらに深まるだろう。これからも、子どもたちが自信をもって活動に取り組み、人とかかわる喜びを感じることができるよう、題材や手立てを考えていきたい。